
DORAEMON ～驚異の真実～

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DORAEMON ～驚異の真実～

【Nコード】

N7411M

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

前回「ANPANMAN」でアンパンマン達の複雑な人間模様と真実を暴いた、ワタクシ、ぬじゃわきしがさらなるタブーに挑む！
ドラえもんの真実とは！

注：あらかじめ「ANPANMAN」を読んでからの方がいいです。

のびたの出生とドラえもん（前書き）

注：あらかじめ「ANPANMAN」を読んでからの方がいいです。

のびたの出生とドラえもん

代々伝わる名家、野比家で大騒動が起きた。ご子息が誕生すると言
うのだ。親族は大騒ぎし、のび助と妻^{たまこ}玉子のいる病院へ一斉に押
し掛けたが、病院が迷惑だと言うので控え室でしぶしぶ待っていた。

やがて、おんぎゃあ、おんぎゃあ、おんあばぎゃあ、と泣き声が聞
こえて来た。親族はどかどかと病室に向かった。無事赤ん坊が産ま
れたのだ。皆ほっとした様子であった。
のび助は玉子に聞いた。

「名前は何にするかい？」

「そうね…聡明でいられるよう、悟くんってのはどう？」

「野比悟…駄目だよ、ウチは先祖代々名前の頭は『のび』なんだ。
のび太にしよう。」

「のびたあ？」

玉子は子につけるにはあまりにセンスが悪すぎると感じて思った。
あなたみたいなのび助ならまだいいけど、のび太だと変に連想する
ものが多いじゃない、伸びた延びたエビータ…

だが親戚も口々に「のび太にしよう!」「のび太だ!」「元気にす
くすくのびのび太!」と叫んだ。もはや「悟」にしよう、と言う者
は玉子の他になかった。皆が口々に言うので、いつの間にか赤ん坊
の名は「のび太」に決まったような感になっていた。その波に玉子
は抗えなかった。

名前を強引に決められた事で一つの弊害が生じた。玉子のはのび太に
愛情が持てなかった。毎日「のび太、のび太」と呼びかけるのが彼
女にとって苦痛でしかなかった。のび太…なんて間抜けな名前、
代わりに「悟、悟」と言えればよかったのに。そう思うと玉子は涙

がぼろぼろこぼれ落ちた。

やがて愛情欠乏は虐待に発展し、のび太に苦難の人生が始まった。身体虚弱な彼は学校からも家から苛められた。唯一の救いは父ののび助であつた。

身体虚弱と言つてもものび太は痩せていた訳ではない。彼は色白で小太りであつた。母に隠れて布団の中で漫画を読みすぎたため、たちまち目が悪くなり、ビン底のようなメガネをかけていた。母はそんな彼の姿に近親憎悪を抱いた。彼女もメガネをかけていたからだ。ま、いや、あの子、私に似てきたわ、いやだわ、と徐々に嫌悪感を募らし、いつしか褒める事を忘れていった。

そんな訳で自信を失つたのび太は成績を悪くする一方であつた。もはや勉強さえも身に入らず、0点ばかり取っていた。だが先生も気にするばかりか、叱つてばかりいた。

そんなこんなでのび太は高校生になった。

彼はすっかり心がひねくり返つて、人型の板に誰かの名前を書いてエアガンで倒すという不気味な趣味にはまりだした。そのうち彼は射撃が上手くなった。

そんなのび太がある日の事……。

嫌嫌勉強をした時に、引き出しが突然開いたのである。

そして信じられない事に引き出しから何者かが這い上がってきた。

「なななななんだこりゃ！」

引き出しから現れたのはおっさんであつた。青ざめていて、丸い眼鏡を掛けていた。口は異常に大きく、にやりと頬まで裂けた笑いをした。おっさんは上半身裸でジーパンを履いていて、筋肉質な腹部には手術痕のような裂目があつた。

おっさんはしわがれ声で自己紹介した。

「ぼく、ドラえもんです。」

出会い

「だ、だ、誰ですか！」

のび太が言っていると彼はにんまりと笑いながら極限のしわがれ声で答えた。

「ぼく怒裸衛門^{ドラえもん}です。名字は鈴木。」

鈴木怒裸衛門。聞いた事もない。のび太は尋ねた。

「…どうやって机から！」

「未来から空間がつながって、いつの間にか辿り着いた。ここはどこだ。住まわせておくれ。」

「冗談じゃない！帰って下さい！」

そう言っていると怒裸衛門は突然凄まじい形相で泣き出した。

「いやじゃああああ、異空間にさ迷ってわしには帰る家がないんじやああああ、おねがいじゃああああ！」

「駄目だ！GET OUT！」

のび太がそう言っていると怒裸衛門は涙を拭って腹の傷の中に手を突っ込んだ。あまりのおぞましさにのび太は身震いした。

「な…なにを…」

そして中から玩具のような銃を出したので更に驚いた。なんだあの傷痕は。怒裸衛門は銃をのび太に向けて言った。

「住まわせないと、殺す。」

のび太はせせら笑いながら言った。

「ちょっと、冷静に考えましょう怒裸衛門さん。そんなチャチな脅しには引つかかりませんよ。所詮偽物でしょう。」

すると怒裸衛門はいったん床に向けて銃を撃った。

ビシュン、ズガガン！

爆発して床に穴が開いた。

「何してんですか！弁償してくださいさ…」

のび太が叫んだ時、怒裸衛門の銃がのび太に向いた。怒裸衛門は言った。

「よかるう。だが、住まわせておくれ。」

こうなつては仕方がない。のび太は頷いた…

とその時、騒ぎを聞き付けて母のたま子が来た。そして目の前に立っている上半身裸のジージパンの筋肉質なおっさんを見て悲鳴を上げた。

「きゃああああ！誰ええ！」

かくして家族会議を始めたが、のび太の話があまりに常軌を逸脱しているため、両親は理解できないままだった。とにかくはつきりしていたのは、鈴木怒裸衛門と言う男か、のび太にとって不本意にも、

部屋に侵入された事であった。だが追い出すのも近所の目があるし、銃を取りあげたとは言え彼が安全である保証は全く無かった。

結局、怒裸衛門はのび太の部屋のすぐ隣、“戸棚”と称した薄暗い部屋に監禁されていた。そこはネズミがうるちよると這い回る不潔な部屋であった。毎回視界に映り、体を歩き回るネズミは怒裸衛門を何度も一時的な発狂へと誘い、次第にトラウマを形成していった

：

のび太が面会に来た時には怒裸衛門はすっかり大人しくなったが、にへらにへらと笑っていた。そして言った。

「ああ…餡子がほしい…餡子がほしいよお…」

「餡子？」

「なんでもいい、甘いものをおくれ…」

のび太は周りの人と目配せしたが、大丈夫だろう、との事で、台所に向かった。冷蔵庫にはどら焼きが置いてあった。とりあえずそれを怒裸衛門に与えると彼は貪るようにどら焼きを食べた。

「うつつ…もつとくれ、もつと！」

以来彼はどら焼き依存症になった。毎日毎日どら焼きを貪り、食べない日には禁断症状が現れ、全身が苦しみ、「どら焼き…どら焼き…」とうめくようになり、小さな小人達が剣を持って自分を襲う幻覚が見え、その晩ネズミに食い殺される夢を見て「がああああ」と吠えたける有り様であった。

彼がどら焼きをそこまで依存するようになったのは、実は壮大な訳があるのだが、あとで鈴木怒裸衛門本人が話す事になろうと思われるので割愛する。

パンツ。

怒裸衛門が監禁されてる間、のび太は相変わらず自室で呪いの射撃ごっこをしていた。人形を立てて、人形に憎いクラスメイト「郷たけし」「骨川スネ夫」の名前を書いては撃っていた。いまや小さな人形の額すら見事に撃ち抜く腕前となった。

その内のび太はより過激な物を求めるようになった。人形なんてたかが物体の破壊など物足りない、ださい、情けない、ただの自己満、餓鬼の為す業だ。しかし僕は餓鬼じゃない、もう大人だ。だから命ある物を狙いたい。もう誰かに痛い目にあわせないと満足できない年頃じゃないか。

ある時からのび太は窓を開けて、木や道路にいる小動物を狙うようになった。しかし動かぬ板に比べ、外界に敏感な動物たちにはなかなか命中しない。のび太は苛々し、その苛々の試練の日々は続く。のび太はこの頃からゲームに依存し始めたが、一般の正常な使用法と異なり、完全プレイヤーに感情移入していて、現実と妄想が結合していた。自分意外は敵なんだ、ふんじゃえ、たおしちゃえと思うようになった。

そしてとうとうのび太自身が変化した。ある日、木刀を購入しては振り回して悦に浸ったりしたし、人と会って、脳天首筋手首みぞおち等、人間の幾つかある急所をつい気になってチラチラ見てしまうようになった。そうしてのび太の狂気は増す一方であった…

芽生えた友情と仕掛けられた陰謀

ついにのび太は、エアスナイパーライフルで人を狙うようになった。だが発射の勇氣は出なかった。畜生、ろくに人殺しもできないなんて、僕は餓鬼だなどのび太は思っていた。学校では何もできない。彼は相変わらず虐められていた。いつもジャイアンこと、郷たけしに殴られ、お金を奪われるのだ。しかし、母のたま子は、のび太にいかなる痣ができようと無視していた。それが母の、親戚への仕打ちなのだ。

のび太はエアライフルをしまってからしばらく空を見つめた。部屋の中は静かだ。以前は隣の怒裸衛門の悲鳴がうるさかったが、ネズミ駆除剤を仕掛けたら静かになったのだ。

ふとのび太は鈴木怒裸衛門が、自分は未来から来たと話した事を思い出した。もしかしたら本当かもしれない。だってあの銃。弾丸も使わないのにすごい威力だ。

のび太は“戸棚”のふすまを開けて尋ねた。

「怒裸衛門、怒裸衛門。」

「なんじゃ、どら焼きか？」

「いや、違う。君は未来から来たんだって？」

「そうだ！　ようやく信じるようになったか。」

「君は未来の何なのさ。」

「未来の？　ロボットだよ。」

「えええ！」

信じられない思いであつた。こんなデザイン性に欠けるロボットがあつてたまるか。

怒裸衛門は話した。

「わしは元々ネコ型になるつもりだった。だが、設計のミスでネコ耳が無くなってしまった。それでこの姿になってしまった。」

「その、腹の傷は収納スペースなのかい？」

「そうだ。四次元空間になっていてなんでも収納できる。」

「なんか収納してるのか？」

「勿論、見たいか？」

「うん。」

すると怒裸衛門は裂けた腹の中に両手を入れ、手術のように腹部をぐちゃぐちゃとまさぐった。そして何か懐中電灯のような物を取り出すと、突然怒裸衛門はそれを天に掲げながら相撲の行司みたいに叫んだ。

「スモウル・ライトオオ」

不可解な沈黙。怒裸衛門は言った。

「すまぬ、セキュリティ機能なんかで、何か取り出したら大声で名前を上げてしまう癖があるんじゃない。」

「うん：分かった。で、何これ？」

「物体に光を当てると物体が小さくなる。」

「へえええ、貸してよ。」

「だめだ。まだ試作段階……」

「いいじゃんか。」

のび太は強引に奪って、床に落ちてる0点のテスト用紙に向かってライトを当てた。

バギギギギギ。

0点のテストはもちろん、光を当てられた床ももろとも縮小されて周りから引き裂かれ、床に大穴が開いた。空気も縮小したため真空空間が出来て、部屋中が乱気流となったので風が吹き荒れ、めっちゃめっちゃになった。

「あああ！」

「ほら言わんこっちゃない。今のところ、一つの対象だけを小さくするのは不可能なんじゃ。」

「なんだそりゃ。」

「それでも改良された方じゃよ。当初は光の当たった部分だけを小さくするものじゃったが、そうなると表面しか効き目がなくてな、人体実験した所、被験者が皮膚だけ縮んだんで大変な事になった。くわばらくわばら…そこである程度の透過性をつけたが、まあどちらにしろこの有り様じゃ。まあ逆の作用の、ビッグライトを使わんでよかった。あっちの方が益々收拾つかなくなる。」

「え？どうなるの？」

「結局はライトの当たる部分だけ大きくなるのじゃろ。これも人体実験したんじやが、被験者は最初まともに巨大化した。が、そのうち、下半身、そして足だけが異常に巨大化して奇怪な姿形になった。今も元に戻れないまま苦しんでおる。おまけに地面の一部分がが巨大化したために周りの地面に圧力がかかり、地殻変動が起きて、大地震になった。」

「…！」

のび太は呆れて物が言え無かった。未来はどうなっているんだ。とりあえず次に言ってみた。

「他の、道具は？」

「おおお、ある。」

怒裸衛門は腹から巨大なドアを引っ張り出して再び宣言した。

「どこでもドアアアア！」

「何これ？」

「思いの場所に辿り着けるドアだ。」

「へええ、便利じゃん。」

「だが、なるべく使わん方が無難じゃな。」

「なんで？」

「空間と空間を繋げて移動させる仕組みだが、移動中にエラーを起こしたり電池が切れたりすると、シャットアウトされると、体の前半分と後ろ半分が……」

「あ、なるほど。」

のび太はこの先の展開を予想して話題を変えようとしたが怒裸衛門は続けた。

「スパアアンと一刀両断。」

「何でそこで言うんだよ！」

「ははは、怖いかな？」

「……………怖くない。で、他には？」

「まあ、いろいろあるが、やはり、一番頼りになるのは……」
怒裸衛門は腹の傷から何かを取り出し、床に置いて言った。

「これじゃよ。」

それは銃だった。怒裸衛門は語る。

「こいつは正しく扱えば決して裏切らねえ。身を助け、人を説得させればピカイチじゃ。良い銃ほど良い働きをする。これはアメリカで使われてるライフルでな。オートマチックだから6発まで装填不要じゃ。だから外しても大丈夫。何人もやれる。」

のび太は感動した。怒裸衛門は自分の思想の共鳴者、いや自分の師だ！のび太と怒裸衛門は仲良くなり、共に笑いあった。二人は飛び回っているハエ型のカメラに気付かなかった。

*

時は変わって遙か未来。時空無線対応の八工型カメラが送信した、怒裸衛門とのび太が笑いあっている光景を見て、覆面を付けた作業員が不安気に言った。

「セワシ様、大丈夫でしょうか：仲良くなつては彼の例の任務が：」
するとある男が自信満々に言った。

「大丈夫、時が来れば、怒裸衛門に“覚醒プログラム”が打ち込まれる。されば必ずよくやってくれる筈だ。」
そう言つて男はわはっはっはと笑っていた。

この男はもちろん先ほどの「セワシ」と言つたあだ名の男である。元々パン屋だった彼はあるあだ名があつたが、バイオ機械の職業に転職してから、配慮の良さから「世話師」：「セワシ」のあだ名がついた。勿論それは彼の本名ではない。

「セワシ」は思う。かつて奪つたあの技術と自分のあの技術を組み合わせれば最強の人造人間が作れる。怒裸衛門はその意図で作りがけた。以前の試作品達は強度に欠ける難があつたが、ホラーマンの骨格を応用すれば「ANCO」を最大限に發揮できる新モデルができるではないか。あの真鍋つて奴はそれが目的だったのだな。ふは、ふはははははははは。

彼は高らかに笑い続けた。彼の名は飯綱秀和。「セワシ」の以前のあだ名は「ジャムおじさん」だった。ちなみに怒裸衛門は、実はしよくぱんまんを改造した物であつた。

続く。

芽生えた友情と仕掛けられた陰謀（後書き）

以前書いた「ANPANMAN」を読まないという意味が分からないかもです。<http://ncode.syosetu.com/n6457m/>

「心の友」グループ

すっかり怒裸衛門とのび太は仲良くなった。学校でも一緒に、常に語りあった。周りは上半身裸のジージャン男に不審がったが、そんな事はお構い無しだ。

「おい。最近のび太うざくねえか？」

と郷たけしはスネ夫含む不良グループに言った。皆は口々に同意した。

「そつだそつだ。あの鈴木ナント力衛門とか言うじじいとつるんでから、調子に乗り始めた。」

「くそおお、この前かつあげしようとしたら、逆にかつあげされたああ」

スネ夫が叫ぶと不良ボスのジャイアンこと郷たけしが言った。

「それはお前が悪い、スネ夫。だが、確かに対処せねばならぬ。スネ夫、貴様の名誉をはらすためにも何かいい案はないか？」

「ははあ、ありがてえ。一つありまっせ。」

「なんだ？」

「のび太の野郎は、源の静香様に惚れていまっせ。」

すると、すっかり不良娘と化した源静香がやさぐれた感じで言った。
「なにになににいい？私を使えってえの？」

スネ夫はたじたと答えた。

「いえ、使うのではなく、お役に立てて頂けたらと。」

「要するに使うって事でしょ。まあいいわ。どうすればいいの？」

「簡単です。のび太は貴方には無防備ですから、そうですね、告白のシチュエーションでメールするのです。」

「メール？アドレス知らないんだけど。」

「じゃあ、のび太mixi入ってるからそこからメッセ。」

「mixiネームは？」

「『皆氏ね』」

「変な名ね。」

「見つけた？」

「うん：わ、紹介文、マイミクやマイミク外の悪口ばっか、日記もコメント132もあってほとんど荒らされてる：なんか、すごい不気味な気持ち悪い心情日記書いてるからかな。」

「だめだなメッセ送っても荒らしか怪しい勧誘と思われて無視される。」

「じゃあどうすればいいの？」

「単純だ。のび太の机に紙を入れるしかない。」

「：そうか、文面どうしようか：」

スネ夫はよく来たと、自らの策士としての腕前を発揮した。

「では：告白は本来は真剣な話ですから、真剣味を伝えるために簡潔かつ用件を明確に書く事が重要で、余計な“はぐらかし”は禁物です。ですから文面ははっきりしてます。某時に公園に来て：これだけで良いです。」

「でも告白と分かりづらいのでは：」

「いや、このような、ある乱暴な簡潔さがすなわち禁忌である告白のニュアンスになっています。さらにこのニュアンスを加速しましょう。速記でやや雑に書くのです。これで、あなたに今すぐ会って言いたいけど、人目があるから、とにかく絶対来て、と言う懸命さが伝わるのです。」

「相手ののび太と考えるとゾツとするわね。」

「とにかくまあ、これで告白らしい感じは伝わります。場所は、うん、告白にふさわしいあの土管のある空き地がいいですな。雷じじいは自分以外の事には一切関わらないし、誰も興味がない。しかもです：告白にふさわしい、と言う事はリンチするにもふさわしい。」

「郷たけしは嬉しさのあまり叫んだ。」

「いいい！さすが、わが『心の友』グループの戦略担当だな。悪魔みてえだ。頭がいい。」

「いいいえ、出来杉に比べれば至らぬもので…」

「ふん、出来杉なんか、せつかくの知恵を自分のおべんきょうのためにしか使ってない、勿体無いやつだ。よし、静香！今から書け！」

「え？でも…たけしの前では…」

郷たけしを前に静香は戸惑った。だが郷は言う。

「いいだろ？それは所詮、嘘の恋文だ。書こうが書かまいが、お前は俺の女だ。」

郷たけしは、郷ひろみの生まれ変わりと噂されるほどに、不良の中でも異例のカリスマ性を持っていた。何人かはあいつは歌が下手だと言っていたが、嫉妬によるものであろう。

そんな彼がのび太に対して危機感を抱いていたのは、のび太もカリスマ性があるからだ。あそこまで憎まれるにはそれなりの何かがないといけない。郷たけしが正のカリスマとすればのび太は負のカリスマ。もしかしたらのび太に何か起きればたちまちたけしは地味な人間に陥る。そんな状況が耐えられなかった。

空き地には静香が立っていたが、土管の裏や中には不良団が隠れていた。準備はできている。後はのび太が約束通り来ればいい。

しばらく待って、のび太は来た。にへらにへらと笑いながら来た。やつは一人だ。怒裸衛門はいない。チャンスだ。郷は密やかに笑う。

戦い

空き地にのび太は来た。静香はスネ夫に指導された通りに、空き地の中央に立っていた。前章にも書いた通り、横倒しになった三本の土管の裏に不良たちが隠れていた。

静香はのび太に接近して言った。

「待ってたわ、実は私ね・・・」

「どけ。」

のび太がいつになく怖い口調で言ったため、静香は危険を察して逃げた。その途端のび太は腹からライフルを取出して撃った。

ずがーん、ずがーん、ずがーん...

*

「僕ら友達。」

「わしら友達。」

これより前の話、怒裸衛門とのび太はそう言って友情を確かめあっていた。

そしてある時怒裸衛門が話を切り出した。

「なあ、のび太、友情の証として、スぺアポケットをもたねえか？」

「スぺアポケット？」

「わしの四次元ポケットの空間に直結するポケットじゃ。」

「え！いいの？」

「勿論。友達だろ？」

「うん...じゃあ...」

すると怒裸衛門は鋭利なナイフを取出し、腹に突き刺した。

「ぐふうつ…」

そしてゆっくりナイフを動かし、腹に刻んでいった。のび太の腹には怒裸衛門と同じ斜めの傷痕ができた……

*

…ずがーん、ずがーん。

その、のび太のスペアポケットから出たライフルで一番前の土管を打ち抜いた。土管からは悲鳴が微かに洩れ、何人か手負いの不良が逃げ出したが、のび太は容赦なく銃弾を放った。
ずがーん、ずがーん、ずがーん。

「おまえらが罌を張っていた事はとっくにお見通しだ。どうだ？堪忍して出てこい！」

のび太が言々と土管の裏から郷たけしが飛び出してマシンガンでずばずばと撃ってきた。幸い命中しなかったのび太は弾切れのライフルを捨て、拳銃を腹から取り出してばひゅんばひゅんばひゅんと撃つが、郷たけしは信じられぬ身のこなしで銃弾から避けた。そして郷たけしは空中に飛んでのび太の拳銃を蹴り落とした。

「ぬほつ…！」

かくしてたけしとのび太のカンフーの戦いが繰り広げられた。身体虚弱ののび太にはとうてい勝ち目はないはずだが、怒裸衛門くれた軍用麻薬のおかげでかつてない力を発揮していた。だが、薬が切れかけている事に気付く。まずい…。

「ぎああああ…！」

たけしが突如悲鳴を上げて後退りした。のび太は気になって尋ねた。

「どうした？郷。」

「は、はら、お前の腹！」

見るとのび太も驚いた。のび太のスペアポケットから怒裸衛門の顔が飛び出していたのだ。

「怒裸衛門！」

「スペアポケット友情の証。ここはわしに任せろ。」

そして怒裸衛門はのび太から飛び出した。

…ここで一つ謎が生まれるが、怒裸衛門はどうやって自分のポケットに入っているのび太のポケットに出たのか。上半身までならなんとかいいのだが、上半身を突破すると、ポケットより下の下半身は入れるには困難な上、ましてや入り口にあたる腹部の脱出は不可能である。したがって合理的には腹部のポケットの口からポケット内部に入ればいいが、骨の問題を抜きにして怒裸衛門を袋とみなして考えれば彼は表裏ひっくり返って、とんでもない姿を地上に晒す事になる。従ってこの問題は永久に不明である。

怒裸衛門は信じられない程の素早さで不良どもをなぎたおした。だがほとんど不良たちが現われた。なかなか人数は減らない。怒裸衛門は突然食パンをのび太に与えた。のび太は尋ねた。

「これは…？」

「暗記パンだ。飯綱発明。書かれた内容を深層意識に刻み込んで覚える、受験対策キット。だが、最近判明したところ、意味不明な事を書いて食べさせると混乱して発狂するらしい。襲われたら食わせろ。」

そう言って怒裸衛門は、のび太の元を離れ、不良どもと戦っていた。暗記パンには「お魚が背伸びして首の向こうまでピンポンパンの魚虫によるくーらくらがコベンコベン」などと意味の分からないこと

が書かれていた。のび太の元に屈強な不良が襲い掛かった。のび太はすぐさまパンを不良の口に押し込んだ。不良はたちまち襲うことをやめていひやひやひやひやと笑い、突然踊りだして不気味な歌を歌いながら空き地の外へ行った。

怒裸衛門の方は、銃を駆使して次々と不良どもをなぎ倒し（！）た。そしてとうとう意識のあるものは静香だけになった。

のび太は憎しみをこめて静香に言った。

「このやろう・・・オレを利用するとは、なんとあくどい、この、くそ、うがああああ！！！！」

そういつてのび太は暗記パンを持って静香に接近したが、なぜか怒裸衛門に襟首を掴まれて放り投げられた。

「いててって、なにすんだよう怒裸衛門！」

怒裸衛門は言った。

「女子供は傷つけちゃなんねえ・・・」

その時静香はハッとした。この人は・・・まさか・・・。

だが、突然怒裸衛門は苦しみ始めた。

「ぬあああ、くああああ、おがああああ！！！！」

「どうした！怒裸衛門！」

傍にハエが飛んでいた。

*

ハ工型機械から移されたモニターには怒裸衛門が苦しみ呻いていた。

「そろそろタイマーが作動したか。」

「おそろく。」

手下の報告を聞いて、飯綱「セワシはにんまりと笑って言った。

「ではわれわれも怒裸衛門のもとへ行くか。」

そして真実へ（前書き）

【注】コレ以前に書いた作品「ANPANMAN」驚異の真実」を
読まないという意味が分かりませんw

そして真実へ

「がああああああ!!!」

と叫び呻く怒裸衛門。のび太は、どうしたのだろうと不安になった。これまで彼に異変はなかった。ではいったいどういうことなのか。

「あああああ………。」

怒裸衛門は突然黙りこくった。どうしたのだろう。異変が収まったのだろうか……

突如怒裸衛門はのび太をじっと見つめた。なぜか恐怖に怯えた目つきであった。怒裸衛門は何かと激しく葛藤していて、やがてそれは眩きにまで発展した。

「……クロス……ダメ……クロス……ダメ……クロス……
・ダメ……ダメ……ダメ……ダメ……クロス……クロス
クロス殺すううう!!!!!!」

突然怒裸衛門は叫んでのび太に襲い掛かった。

「どうしてだよ怒裸衛門! どうして!」

「クロス、クロス、クロス、」

「目を覚まして! 僕ら友達だろ!」

セウシ飯綱は土管の裏側からこの光景を見てほくそ笑んでいた。そう。スカイネットという会社に就いていた飯綱は、ついに気が狂って、真鍋の先祖を殺そうと決意した。そのために作られた抹殺者「ターミネーター」が怒裸衛門なのだ。

すべては仕組まれていた。怒裸衛門はのび太と友達になるようプログラムされ、やがて時間が経つとのび太を殺せという命令が下る。飯綱の計算では怒裸衛門は人間の二倍の力を有するため、反撃され

て負ける可能性はないはずである。

いまや白目をむいて襲い掛かる怒裸衛門。のび太はひたすら逃げていた。親しい友達に銃を向けたくないが、ここは仕方ない。のび太は怒裸衛門の足に向けて一発打った。

バァァン！！！！

ところがまったく効果はない。そうだ怒裸衛門はロボットだと今更ながらのび太は気づいた。

そしてひたすら逃げる。隠れようにも隠れる場所がない。土管には死体が累積している。ちくしょう……どうすれば……。

その時目の前に郷たけしが現れた。そして怒裸衛門に突進した。

「ジャイアン！！！！」

「逃げる……のび太……おめえは静香に免じて許してやる……だから……はやく逃げ、ぐはぁ」

いとも簡単に屈強な郷たけしをなぎ倒し、怒裸衛門は再びのび太を追いかけた。

そしてとうとう追い詰められる。全身を押さえつけられたのび太は必死にもがくが怒裸衛門の力には抗えない。そこでのび太は最後の抵抗を試みた。

「やめろ！怒裸衛門。僕たち友達だろ！」

そして服をまくって、のび太は自分の腹に刻み付けられたスピアポ
ケットを見せた。

すると怒裸衛門は「トモダチ……」と呟いて、抑える力を弱め
た。

セウシ飯綱はむしゃくしゃした。

「なんだ、くそ、感情が芽生えやがって。ちくしょう！」

リモコンを押した。

たちまち怒裸衛門は「がああああ！」と苦しんで再びのび太を襲お
うとする。もうだめなのか、とのび太はあきらめようとした。

そのとき静香が叫んだ。

「やめて！しよくばんまん！」

その時、怒裸衛門の動きが止まった。そして怒裸衛門の脳裏にこれ
までの記憶がよみがえった。

*

自分はかつて演劇や歌などに優れた、才気溢れたしよくばんまん
であつた。しかしなぜだろう。アンパンマンに体はいらぬ、顔だけ
を大量に量産して飛ばせばいい、とジャムおじさん飯綱が結論した
とき、何かが変わった。ロールパンナは発狂し、人造人間たちはも
はやパトロールには不要になり、ひたすらパン屋に従業していた。
そのパン屋を閉じたとき、このままでは自分は終わりだと追い詰め
られ、ジャムおじさん飯綱に必死に懇願した。

「お願いします！どうか、私を見捨てないでください！」

「君たちは、もう用済みなのだよ。パンのごとき弱い生命体で何が
できよう。たしかに再生力はあるが、今はそんな時代じゃないのだ
よ。見る。」

飯綱が指差した先には、「飯綱発明」と称したホラーマンたちがず
んどこずんどこ歩いていた。

「今は『ホラーマン』の時代だ。お前のような弱者には用はない。」

「しかし、ジャムおじさん！」

「おっと、今は私はジャムおじさんではない。セワシってあだなな
のだよ。これから私を呼ぶときはセワシ様と呼べ。」

「・・・・・・・・分かりました、セワシ様。」

ふとしよくばんまんはアイデアが思いついた。

「では、わたしを改造して新しいロボットを作ってください。『A
NCO』を使ってもかまわないです！」

飯綱はにやりと笑った。

*

すべての記憶がよみがえり、怒裸衛門は正気に立ち返り、殺人プロ
グラムが阻止された。そして静香を見た。怒裸衛門は驚愕した。

「おまえは・・・・」

「ちくしょう！！！！」

飯綱は叫んだ。

「くそ、役立たずのパンめが！私かのび太を始末する！」

そして銃を持ち出してのび太に向けた・・・

その時、ブォンブォンという音が響き、空間に穴が開いて白バイが大量に到着した。なんだ？と飯綱が振り返ると彼は驚愕した。

「タイムパトロール！！！」

そして白バイの先頭からヘルメットをかぶってスーツを着た男が降りた。その男がヘルメットを脱いだ。その顔は輝くようなイケメンであつた。

「真鍋！！！」

そう、かつてはバイキンマンと名乗っていた真鍋リチャード。たしか殺したはずなのにと、ジャムおじさん飯綱は混乱した。

真鍋は言った。

「飯綱秀和！貴様を逮捕する！大量の殺人や、横領、剽窃の疑いだ！」

「なぬ？どうして・・・」

「オレは生き延びた。そして、このことを予期して事前にスパイを送り込んだのだ。」

静香が手を上げた。飯綱は叫んだ。

「おまえは！」

「そうだ、わが妻のドキンちゃんだ。町中の皆に記憶を植え付けて、ずっと見張っていた。」

「そんな・・・」

「もう、貴様はこれ以上の悪行ができないようにしてやる。はーはははは、はっひふっへほー！！！」

そして真鍋は飯綱に手錠をかけてバイクに縛った。

静香「ドキンちゃんも行きそうだったので、のび太は言った。

「え・・・行っちゃうのかい？」

「そうよ。でも安心して。あなたの子孫と結婚するのだから。」

真鍋は微笑んだ。

「大丈夫じゃない。あなたにはいい友達がいるわ。」

のび太は振り返った。怒裸衛門がニヤニヤと笑ってこちらを見つめていた。

「そうだね・・・」

「じゃあ、さようなら・・・」

そしてバイクは行く。のび太はだんだんと涙が溢れて泣き出した。怒裸衛門が慰める。この感動的なラストシーンを背景に、エンディングテーマが流れる・・・

アツタマデッカッデーカ、さーえてぴっかっぴーか、そーれがどーうーしーーたー、ぼく怒裸衛門ー・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7411m/>

DORAEMON ～驚異の真実～

2010年10月12日08時19分発行